# 北海道の地域教材に一般性をさぐる

## ―教授プラン「昆布にみる日本の歴史」の構想―

梅津　徹郎

**抄録**：本稿では地域教材である「昆布」に焦点をあて，教育内容と教材の一般性について検討した．歴史教科書の幕末明治史が政治史, 事件史に偏っている点をあらため, 商業資本の形成に寄与した「北前船」の活動と幕末雄藩の「薩摩藩」の財力形成を促した「昆布の密貿易」, さらにその担い手となった「富山の薬売り」などを取り上げ，教授プランの作成を試みたものである．なおこのプランは高校教育における日本史および総合的学習の時間を想定して作成したものである．

**キーワード**：北前船，蝦夷の昆布，富山の薬売り，薩摩藩，琉球王国，明治維新

### １．はじめに

筆者は2016年度北海道文教大学公開講座において「昆布にみる日本の歴史と環境問題」を開講した．一般市民が対象であったが，そのベースとなったものは1998年から2003年にかけて筆者自身が札幌市内の公立高校で実践した授業と道内の研究者，教師による授業実践である[1)]．

筆者が「昆布」の教材開発を試みるきっかけとなったのは「昆布ロード」の存在を知ったことにはじまる．なかでも北前船や他の交易船と加賀藩（前田家），長州藩（毛利家）・薩摩藩（島津家）との歴史的関係性を蝦夷（北海道）の「昆布ロード」から概観することで，とかく政治史，事件史に偏りがちな教科書的な明治維新史の再検討にもつながるものと考えたのである．また幕末明治期に北前船が果たした歴史的役割をみると，表舞台にはあまり登場しない商人や庶民の活動が明らかになり，同時に島津の侵攻を受けた琉球国との歴史的関係から，「日本－琉球－清国」を結ぶ東アジアの交易史も浮かび上がってくるのである．

地域教材でありながら，そのなかからどのような一般性を見いだすことができるのか．教育内容としての一般性か，教育方法としての一般性か，あるいは地域教材そのものがもつ一般性か．これらのことは授業研究，地域教材開発において重要な課題である．本稿では教授プラン「昆布にみる日本の歴史」を通じて地域教材の一般性について検討を試みた．

### ２．教育内容の「科学性」と教材の「典型性」「具体性」

1970年代, 北大教育方法学研究グループは教育内容の「科学性」と教材の「典型性」および「具体性」について以下のように論じた[2)]．

「教育内容は，現代科学のもっとも一般的・基本的概念や法則をもって構成しなければならない．そして教材は，このような教育内容を正確ににな う実体として，子どもの認識活動の直接的な対象…として位置づけられるのである．」

「教育内容が確定したら，その教育内容の本質をになう典型的な教材を考え，創りだし，一定の順序に構成することが課題となる．」（教材の「典型性」）

同時に子どもたちが五官や既知の知識を使って認識対象を分析したり，操作したり，総合したりするためには，その認識活動（学習活動）を「確実に容易になしうる性質を教材はもたなければならない.」（教材の「具体性」）

教授学（教育方法学）が実践の学であるためには，上述の教材論を前提とした教授プログラムを創り，実践を通して教育内容構成や教材の良し悪しを実証的に検証していくことが必要である.

本稿では北海道の地域教材として「昆布」をとりあげ，その教材開発の可能性について教授プランとともに述べることにするが，このような地域教材開発は教育内容や教育方法等に一般性を見出すことができるだけではなく，それらはカリキュラム開発とも連動性をもつものでもある[3].

## ３．幕末・明治維新史を商業資本の発展からみる

幕末から明治にかけて活躍した北前船や雄藩所有の大型船による昆布や漢方薬の「密貿易」は，莫大な利益をもたらし，豪商は財力を蓄え，また地方の藩であった加賀，薩摩，長州なども財力を蓄え，明治維新遂行の物質的基盤をつくったという史実がある．さらに地方銀行の設立にあたって，財力を蓄えた豪商たちが商業資本家，産業資本家として金融を支配していったという歴史的な実態も浮かびあがってくる.

明治維新史に関する歴史学書は多数出版されているが，おおよそ共通している歴史的評価を経済的側面から簡潔に述べてみる[4].

明治維新とは日本において幕藩体制（封建制）から資本主義への移行を強力に推し進めた政治，経済，文化の全体的変革であった．封建制の土台を揺るがしたものは以下の事柄である.

1）商品生産の全国的な発展があった.

2）商業資本の発展があった.

財力のある商人は生産物を安く買い，それを高く売ることで利潤をあげた．商品の流通を専門的に営み，市場拡大や流通機関の短縮などをおこなった.

3）各地の問屋制家内工業やマニュファクチュアの成長があった.

4）農民層の分解が進行した.

農業の資本主義化にともなって，農民の一部が農業資本家や富農となり，貧農層が多く形成された.

5）国内市場の形成がすすんだ.

農民層の分解がすすみ，貧農がこれまで自給自足していた消費材を貨幣（現金）で買い，富農が土地，肥料，農具などの生産手段をより多くの貨幣で買うようになる過程は，同時に産業資本のための国内市場の形成を促すことにもつながった.

## ４．昆布という地域教材に一般性を見出す

筆者は昆布という地域教材がもっている一般性を以下の２点に見出している.

第一は食文化としての一般性である．北前船が蝦夷から運んだ昆布が全国各地に広がり，昆布を用いた料理が全国に存在している．昆布食文化のみならず，日本食（和食）に欠かせない出汁も「カツオ出汁」と並んで「昆布出汁」が全国に広がっている[5].

第二に昆布という商品が果たした歴史的役割である．それは先述した幕藩体制を崩壊させ，資本主

義への移行を推し進めた「商業資本の発展」に一般性を見出すことができる.

概略を箇条書きでまとめてみる.

○加賀,富山を本拠地に北前船を所有した商人が大坂⇔瀬戸内海⇔日本海沿岸各地⇔蝦夷（江差,箱館など）を行き来し，全国の商品を売りさばくことで莫大な利益をあげていた.

○幕末期，藩財政の悪化に窮していた薩摩藩（島津）は富山の売薬商人を使って蝦夷から大量に昆布を薩摩に運ばせ，支配下においていた琉球王国を中継地として中国（清）と昆布の密貿易をおこなった．清からは高価な各種「漢方薬」を買い入れ，それを富山の売薬商人に売った.

○昆布の密貿易による利益により薩摩藩の財政は一気に改善し，逆に莫大な蓄財を成すこととなった．また富山の売薬商人は清からの漢方薬を高値で全国に売りさばき，莫大な利益を蓄積し，商業資本家として成長していった.

○ 1853 年のペリー来航以前から日本国内には幕藩体制の行き詰まりは顕著であった．経済力のある豪農，豪商は西洋の科学や技術に強い関心をもっており，それらの豪農，豪商は雄藩（薩摩藩や長州藩など）と結びつき，資金面で近代化の後押しするようになった.

○薩摩藩（島津）は攘夷から倒幕に転じるにあたり，大量の兵器（軍艦，大砲，銃など）をイギリス商人から買い付けることになったが，その資金は昆布の密貿易によってつくられたものであった．すなわち，昆布の密貿易による資金が西南雄藩（加賀藩・前田，薩摩藩・島津，長州藩・毛利，佐賀藩・鍋島，土佐藩・山内）の倒幕運動・明治維新を後押ししたのである.

これらの事実をつなぎ合わせると，幕末から明治にかけての日本の近代化を支えた経済事情が北海道の「昆布」という地域教材から教育内容の一般化を可能になるのではないかと考えられる.

## 5．教授プラン「昆布でさぐる日本の歴史」の授業構成と解説

以下，本稿では高校における日本史・総合学習として扱う「昆布にみる日本の歴史」の授業構成とその解説を記述していく.

問題 1）日本で昆布（コンブ）がよく獲れる地域はどこだと思いますか？

ア）だいたい日本全国でとれる.

イ）北海道と東北の一部だけでとれる.

ウ）北海道から新潟，富山にかけての日本海側でとれる.

エ）北海道から関東にかけての太平洋側でとれる.

問題 2）昆布の消費量（一世帯あたり）が日本一の都道府県はどこだと思いますか？

ア）北海道　イ）東京都　ウ）富山県　エ）大阪府　オ）沖縄県

総務庁（現総務省）統計局発行の『家計調査年報』－「都市階級・地方・都道府県庁所在地別 1 世帯あたり年間品目別支出金額購入数量」－からデータを拾ってみる.

2000 年前後の統計資料では，富山県と沖縄県が昆布の消費量日本一を分け合っていたが，その後，沖縄県内の消費傾向が変化し，昆布の消費量は減少してきている．しかし全国的にみても富山県，沖縄県の消費量が多いことには変わりがない.

| 総務省統計局家計調査年報 | （都道府県） | （市町村） |
|---|---|---|
| 1985（昭和 60）年 | 1 位　沖縄県 | 1 位　那覇市　2 位　富山市 |
| 1987（昭和 62）年 | 1 位　沖縄県 | 1 位　富山市　2 位　那覇市 |
| 1990（平成 2）年 | 1 位　沖縄県 | 1 位　富山市　2 位　那覇市 |
| 1992（平成 4）年 | 1 位　沖縄県 | 1 位　富山市　2 位　那覇市 |

2014（平成 26）年度の総務省統計局家計調査年報では　昆布消費量トップ 3（都道府県）は，1 位富山県，2 位福井県，3 位　島根県…14 位　大阪府…19 位　沖縄県…41 位北海道となっていて，沖縄県はかなり順位を下げている．

沖縄県内の食生活の大きな変化がうかがえるが，北陸の富山県，福井県の消費量が多い事実は授業プランでも生かされている．

問題 3)「社団法人 日本昆布協会」という団体があります．この団体の本部がある都道府県はどこだと思いますか？

ア）北海道　　イ）東京都　　ウ）富山県　　エ）大阪府　　オ）沖縄県

［問題 1］～［問題 3］までは，答えに意外性をもたせた導入問題である．答えは，問題 1：イ，問題 2：ウとオ，問題 3：エ　である．

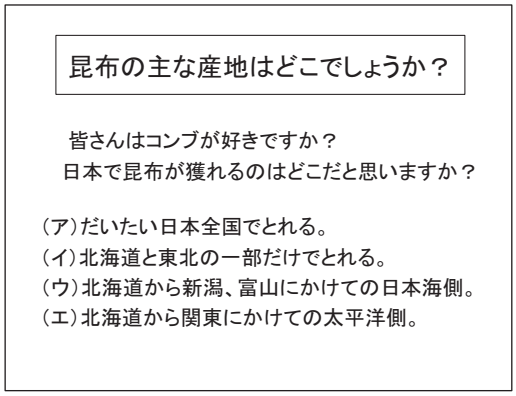
［問題 1］では，日本全国で食されている昆布が，北海道と東北の一部でしか採れないという事実を，［問題 2］では昆布の消費量が多いのは，昆布の採れない富山県や沖縄県であることを示し，同時に富山県や沖縄県がなぜ消費量日本一なのかを考えさせる契機とする問題である．

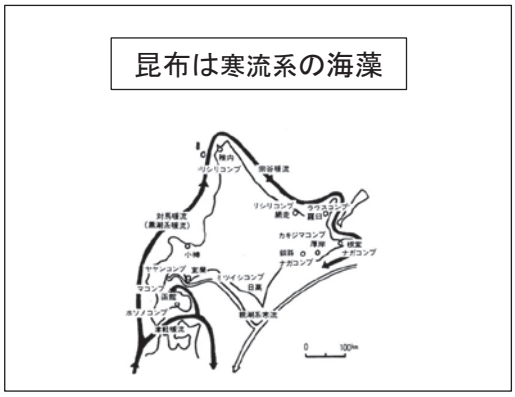
［問題 3］では，日本昆布協会の本部が北海道でも富山県でも沖縄県でもなく，大阪府にあるのはなぜなのか，思考を揺さぶりながら本題に入っていくことにした．

江戸時代の物流の拠点は大坂であり，「天下の台所」といわれた．西日本や全国の物資の集散地として栄えた大商業都市であり，諸藩は大坂に蔵屋敷をおき，領内の年貢米や特産物は大坂商人を通じて販売し，貨幣の獲得につとめていた．明治以降もこの大商業都市としての名残から「昆布協会」の本部が大阪におかれたのである．

以下，使用した授業用スライドを提示しながら，補足的解説をおこなうことにする．

6)




植物としてのコンブを生態（生育分布地）からみると，寒流系（親潮）の海藻である．

北海道の日本海側からオホーツク海側を通る暖流系（黒潮・対馬暖流）では函館付近（マコンブ），

積丹付近（ホソメコンブ），利尻コンブ，羅臼コンブが採れ，親潮系寒流が流れ込む根室（オニコンブ）から，えりも，日高・三石あたりではオニコンブ，ナガコンブが採れる．

### 北海道のコンブ

### 昆布の消費量日本一はどこ？

・ 昆布の消費量（一世帯あたり）が日本一の都道府県はどこだと思いますか？

（ア）北海道
（イ）東京都
（ウ）富山県
（エ）大阪府
（オ）沖縄県

### 昆布の消費量

富山市と那覇市に着目

- 1985（S60） 1位 那覇市 2位 富山市
- 1987（S62） 1位 富山市 2位 那覇市
- 1990（H2） 1位 富山市 2位 那覇市
- 1992（H4） 1位 富山市 2位 那覇市

### 富山県と沖縄県が消費量日本一を競っていました

- 総務省統計局「家計調査年報」によれば・・・・
- 1980年～1990年代は富山県と沖縄県が消費量日本一を競っていました。
- **昆布が採れない富山県や沖縄県で消費量が多いのはどうしてだと思いますか？**

### 「日本昆布協会」の本部はどこ？

「社団法人　日本昆布協会」という団体があります。この団体の本部がある都道府県はどこだと思いますか？

（ア）北海道
（イ）東京都
（ウ）富山県
（エ）大阪府
（オ）沖縄県

### なぜ日本昆布協会が大阪に？

- 江戸時代、大坂は「**天下の台所**」といわれ、全国の商品、産物が運ばれていた。
- 蝦夷の**昆布**も大坂に集められていた。
- 江戸は武士のまち、大坂は商人のまち。

- 一般社団法人　日本昆布協会
  大阪市北区梅田1－1　大阪駅前第3ビル12階
- 「11月15日」は「昆布の日」

### 陸路と海路 ／ 北前船の誕生

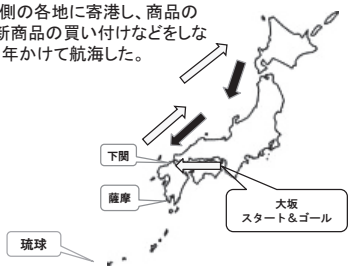
- 蝦夷や日本海側の産物は敦賀・小浜（福井県）から**琵琶湖**を通って京都・大坂へ運ばれた。
- 海⇒琵琶湖⇒陸路と何度も荷の積み下ろしがあり、手間がかかった。
- 陸路では山道の困難や山賊に襲われることもあった。
- **距離は長くなるが、安全に早く大量に安く大坂に荷を運ぶ航路が考えられた。**

**【西回り航路】**

### 西回り航路と北前船の誕生

- 最初の試みは加賀藩主・前田常利（1639年）の時であった。（藩米を大坂に運ぶため）
- その後幕府の命を受けた**河村瑞賢**が「西回り航路」（**大坂⇔**瀬戸内海**⇔下関⇔**日本海）を拓き、「**北前船**」が誕生した。
- 下関（長州藩）は北前船で運ばれた品物の中継基地として「**西の浪速**」といわれるほど繁栄した。

北前船は、大坂で品物を積み込み、瀬戸内海・下関を通って日本海へ。日本海側の各地に寄港し、商品の売買、新商品の買い付けなどをしながら、1年かけて航海した。




## 北前船の航路

①北前船は大坂を出発して瀬戸内海、下関を通って日本海へ出る。
②日本海沿岸の各地（加賀、富山、新潟など）に寄港しながら商品、物産を販売し、蝦夷・江差へむかう。
③江差で昆布・海産物を大量に仕入れ、再び日本海沿岸の各地に寄港し、海産物の一部を売り、さらに現地仕入れをして行く。
④北前船は下関を通り、瀬戸内海から大坂へ戻り、途中で仕入れた物産を大坂でおろす。

## 北前船が運んだ商品、物産

【問】北前船はどのような商品、物産を運んでいたと思いますか？

- 日用品・・・
- 加工食品・・・
- 海産物・・・
- 各地の名産品・・・

## 「上り荷」：蝦夷⇒日本海・瀬戸内海⇒大坂

- 身欠き鰊、鰊（ニシン）のしめ粕、昆布、干鮭、塩鮭
- 熊やアザラシの獣皮類　ほか

- ５月の**江差**はニシン漁でにぎわっていた。また北前船の寄港で多くの商品、物産が集まっていた。

**「江差の五月は江戸にもない」**と言われた。

## ニシンのしめ粕＝畑の良質な肥料

ニシンを煮た後、圧縮器でしぼり、水分と油を取り出し、残った物を乾燥させるとニシン粕という魚肥として使える。窒素分、燐分に富む良質な肥料であった。

河内木綿
綿の生産を支えた

俵には約90kgのニシン粕が入っていた。

## 「下り荷」：大坂⇒瀬戸内海・日本海⇒蝦夷

- 米、塩、酒、味噌、醤油、茶、煙草、
- 綿、呉服、紙類、金物類、陶器、漆器
- 漁網、縄、わら製品、薬　ほか

酒田の紅花　⇒京友禅の染料
青森のヒバ　⇒能登の輪島塗のお椀の材料

（問）蝦夷に縄やわら製品が運ばれた理由はなんでしょうか？

## 北前船の航海期間は？

- 北前船は1年に1回の航海であった。
- 春の彼岸の**2月下旬**に大坂を出港し、瀬戸内海から下関を通り、各地に寄港しながら**6月**に蝦夷に到着する。
- ６月はニシン漁の最盛期であった。
- 蝦夷で海産物（しめ粕や昆布）を仕入れ、各地に寄港しながら**12月**に大坂に戻って来る。

## 北前船の利益（もうけ）はいくらか？

- 北前船は1年に1回の航海で、その利益は「千両」といわれ、現在の「1億円」に相当する利益をあげていた。
- 富山売薬の商家であった蜜田家（屋号：能登屋）は北前船を所有し、大きな財を成していた。
- 越前の右近家も北前船で財をなした。

### 越前の右近家の利益

1869（明治2）年の資料から
- 「上り荷」（蝦夷⇒大坂）の売り上げ
  30313 両
- 「下り荷」（大坂⇒蝦夷）の売り上げ
  2123 両

- 「上り荷」は「下り荷」の**14倍の売り上げ**であった。

### 昆布ロードとは

- 江戸時代中期（1750年代）から明治時代中期（明治30年代）にかけて、蝦夷地（北海道）で収穫された昆布が**北前船**で日本海側から新潟・富山・金沢・敦賀・京都・大坂へ運ばれ、さらに薩摩（鹿児島）、琉球（沖縄）を経て、清国（中国）に運ばれていた。

その道筋を昆布ロードという。

北前船（大坂⇔蝦夷）の利益については，奥井隆『昆布と日本人』（日本経済新聞社，2012 年，p42）に具体的記述がある．

### 蝦夷・薩摩・琉球・中国をつなぐ「昆布ロード」の形成

倒幕を支えた資金

### 幕末期の薩摩藩の財政状況

- 当時の薩摩藩の収入は年間**13万両**。
- 藩の負債 **500万両**（さらに年間利子**60万両**）
  1両＝5万円で換算すると・・・
  収入　13万両＝**65** 億円
  負債　500万両＝**2500** 億円
  年間利子　60万両＝**300** 億円
- 負債の多くは薩摩商人、大坂商人からのもの。
- 返済は不可能である。

### 薩摩藩の“財政再建”と調所広郷

- 薩摩藩（島津家）は加賀藩（前田家）に次ぐ全国第2位の雄藩であったが、1820（文政3）年当時、藩の負債が「500万両」であった。
- 藩主：島津重豪（しげひで）は1831年、家老：調所広郷（ずしょひろさと1776－1848）に「10年間で借金をなくし、さらに50万両の蓄財」をつくるように命じた。

調所広郷による借金踏み倒し（財政再建）は無謀ではあるが，それと引きかえに商人たちには専売品の取り扱いでの優遇など“見返り”を用意していた．

**調所広郷の「借金踏み倒し」策**

- 借金を「250年の年賦返済、無利子」とすることを商人に押しつけ、借用書を取り返した。
- その見返りとして、一部の商人資本にたいして藩の専売品などを優先的に扱わせた。それにより商人の利益はあがった。

**調所広郷の藩財政再建と諸策**

- 借金の踏み倒し。
- 奄美群島（大島、喜界島、徳之島）の黒砂糖を藩の**専売品**とし、同時に厳しい税の取立てをおこなった。

さらに・・・

- **「昆布の密貿易」による蓄財を考えた。**

**富山の薬売り＝蜜田家**

- 富山の売薬商「**能登屋**」の蜜田家は**北前船を所有**して、財を成していた。
- 売薬商は全国を22ブロックに分け、「組」をつくって各地をまわっていた。
  「南部組」「関東組」「薩摩組」など。
- 富山の薬売りは全国各地を回るため、諸藩や蝦夷地の様子など多くの情報をもっていた。

**薩摩藩と加賀藩（越中）の薬売り**

- 薩摩藩（調所広郷）は“財政再建”のため、越中（加賀藩）の薬売り（能登屋＝蜜田家）にたいして、領内での営業を認める交換条件として、蝦夷の**昆布**の提供を求めた。
- 薩摩藩は中国（清）との**密貿易**の利益で藩財政再建を考えた。
- 富山の売薬「薩摩組」はその見返りとして中国（清）から**漢方薬の原料**を安価に入手するルートを確保した。

富山の売薬商人（たとえば密田家）は自分の船をもち，頻繁に蝦夷地に薬を売りに行っていた記録がある．また，薩摩藩が富山の売薬商人に，昆布の代金を支払うという形で 300 両の資金援助をしていたという記述もあり，さらに『富山売薬業史史料集』（高岡高等商業学校編，1936 年）の中には，「極隠密被」と記述された文書が紹介されている．

この記述からも，琉球⇔中国への昆布輸出は「密貿易」であったことがうかがえる．しかし，密貿易であったがゆえに，正確な輸出量を示す記録は残されていない．

北前船は琉球へは直接行ってはいない．薩摩と琉球を往復した船は，薩摩藩の船と海商船であった．また琉球と中国を往復した船は琉球の「進貢船」と海商船であった

鹿児島県歴史資料センター「黎明館」には『進貢船帰港之図』があり，中国帰りの進貢船を薩摩藩の家紋（丸に十字）を掲げた琉球の小型船が迎えに出ている様子が描かれている．

**薩摩藩と加賀藩（越中）の薬売り**

- 薩摩藩（調所広郷）は“財政再建”のため、越中（加賀藩）の薬売り（能登屋＝蜜田家）にたいして、領内での営業を認める交換条件として、蝦夷の**昆布**の提供を求めた。
- 薩摩藩は中国（清）との**密貿易**の利益で藩財政再建を考えた。
- 富山の売薬「薩摩組」はその見返りとして中国（清）から**漢方薬の原料**を安価に入手するルートを確保した。

**「薩摩⇔琉球⇔中国」の密貿易品**

- 薩摩藩は那覇港に「**昆布座**」という出先機関を置き、密貿易用の昆布を集荷した。
- 【清への輸出品】**昆布**、干しアワビ、フカヒレ、砂糖、刀剣など。
  昆布の輸出量は全体の80％を占めていた。
- 【清からの輸入品】：**漢方薬の原料**（ジャコウ、リュウノウ）

### 蜜田家の活動

- 蜜田家（能登屋）は富山の売薬「薩摩組」の中心的存在として活躍した。
- 薩摩藩内では50～60人の「薩摩組」の売薬人が行商していた。
- 北前船「長者丸」を所有し、昆布の密貿易を支え、清からの漢方薬原料をもとに全国に高値で漢方薬を販売して財をなした。
- 築き上げた財は明治以降、銀行、保険、運輸、紡績など様々な分野に投資した。

### 薩摩藩の“財政再建”完了

- 1840（天保11）年、調所広郷による薩摩藩財政再建が完了した。
- 調所は昆布の密貿易による利益によって、**50万両** の蓄財をつくり、さらに10年後には**100万両** の蓄財をつくるに至った。

### 薩摩藩の製造工場建設

- 1851年、薩摩藩主島津斉彬は**反射炉**（製鉄所）を建設し、大砲鋳造、造船、紡績機、ガラスなどの**製造工場**を建設した。
- これらは、薩摩藩の軍事力を大きくする基となった。
- なお1850年には佐賀藩でも反射炉の築造を開始している。

### 昆布の利益が倒幕資金になった可能性

- 薩摩（鹿児島）と長州（萩・下関）
  **「薩長連合」（加賀藩も後押し）**
  「薩長連合」により、攘夷から倒幕へむかう。
- 昆布、漢方薬などの密貿易で得た莫大な利益が倒幕資金になったと考えられる。
- 薩摩藩の兵器購入ではグラバーが動いた。

薩摩藩がイギリスなどからの兵器購入や自藩で反射炉の建設，大砲製造，造船に着手するには多額の資金が必要である．この資金こそ「昆布の密貿易」による莫大な利益だったのである．

### 兵器調達とグラバーのうごき

- トーマス・ブレーク・グラバー（英）は、長崎市の観光地「グラバー邸」として名を残している。
- グラバーは幕末期に薩摩、長州、土佐、佐賀、熊本などの諸藩と接触していた。
- 1864年～1868年の5年間に**鉄製蒸気船を24隻** 販売している。
  **薩摩6隻**、熊本4隻、徳川幕府3隻、佐賀3隻、長州3隻、その他宇和島藩などに5隻販売。

### グラバーの武器販売量

- グラバーは艦船以外の武器も販売した。
- 幕府にたいして大砲**35門**、弾丸**700トン**を販売した。
- 小銃は **1万2825挺**　販売した。

### 幕末期の銃の値段はいくら？

- 幕府は1864年にオランダのミニエー銃を採用。
  慶応元年（1865年）　1挺＝18両
  慶応4年（1868年）　1挺＝9両以下。
- 銃の性能には大きな差があり、値段は1挺が10～40両と幅があった。（新政府軍×幕府軍）

仮の試算（**薩摩藩の備蓄挺100万両のゆくえ**）
1挺＝10両の銃を10万両（備蓄金の10%）で買い付けるとしたら、薩摩は**1万挺の銃**を持つことになる。

### 高杉晋作（長州）と坂本竜馬の会話？

- 高杉「軍艦10隻とミニエー銃1万挺がほしい。15万両もあれば･･･」
- 坂本「長州には金がうなるほどあるだろう。」
  （冨成博『維新閑話 4版』長周新聞社、1987）
- 長州藩にはかなりの「機密費」（帳簿にのらないお金）があった。
- グラバーからミニエー銃7300挺を9万2400両で購入している。（12両/挺）
- 軍艦1隻　3万9000両で購入している。

反目していた薩摩藩と長州藩が 1866 年,「薩長連合」を成立させたが，この時グラバーが坂本龍馬を仲介役として薩摩藩と長州藩に引き合わせたとも言われている.

**密田家と右近家の財力と日本の近代化**

- 密田家は第百二十三銀行（北陸銀行）の設立に寄与。
- 右近家は日本海上保険会社の設立に寄与。
- 北前船主たちは、昆布ロードで得た莫大な利益を日本の近代産業の資本として活用し、保険業、銀行業、電力業、米穀・肥料業などの経営に携わっていった。

**「ほくぎん」って何ですか？**

| 北陸銀行 | みちのく銀行 | 青森銀行 |
|---|---|---|
| 札幌　8店舗 | 函館　6店舗 | 函館　2店舗 |
| 函館　3店舗 | 札幌　1店舗 | 札幌　1店舗 |
| 小樽　2店舗 | | |
| 旭川　1店舗 | | |
| 釧路　1店舗 | | |
| 帯広　1店舗 | | |
| 江別　1店舗 | | |
| 苫小牧　1店舗 | | |

北海道に北陸銀行の店舗が多いのはどうしてだと思いますか？

明治期に入り, 鉄道網（蒸気機関車）が発展したため, 海運業（北前船）は縮小していくことになった．しかし北前船によって蓄えた莫大な利益は近代産業の資本として活用されたのである.

北陸銀行の前身である「富山第百二十三銀行」の設立には密田家が強く関わっている.

北海道の隣県である青森県の銀行にくらべ，富山県に本店がある「北陸銀行」の数が格段に多い理由は，やはり北前船との歴史的関係によるものである.

また，富山の北前船と北海道との深い関係を示す建物が小樽市に現存しているのも興味深い.

なお，以下のスライド写真はいずれも JR 北海道車内誌『THE JR Hokkaido』，2016 年 1 月号，355 号より転載した.

旧大家倉庫（色内2丁目）。
瀬越出身の北前船主・大家七平が建造。

廻船問屋塩田安蔵の別邸として建てられた。
現在は「小樽洋食処　夢二亭」として営業している。

北前船で活躍した船主，商人としては銭屋五兵衛，高田屋嘉兵衛なども歴史書に登場するが，昆布ロードと昆布の密貿易に焦点をあてた場合，やはり「密田家」の存在が大きいと言える.

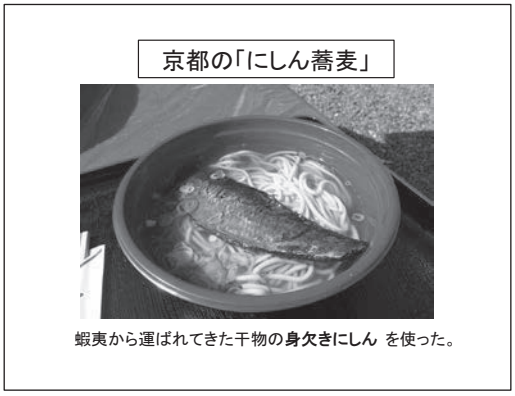
商業資本がやがて産業資本として日本の近代化に果たした歴史的役割を蝦夷（北海道）の「昆布」から検討し直し，新しい教育内容構成の教授プログラムを検証していくことは意義深いものがあるといえる.

## 6．おわりに

高校（あるいは中学校）で日本史の授業として実施する場合，現行の学習指導要領では時間的な制約がある．この教授プランは「総合学習」として実施することが現実的であろう.

なお今回は「食文化としての一般性」に関する教授プランは紹介できなかったが，富山の各種昆布

料理, 蝦夷の身欠きニシンを使った京都の「にしん蕎麦」, 沖縄料理の「クーブイリチー」や「リュウキュウイノシシ汁」など，北前船に由来すると思われる様々な昆布料理の全国的な広がりを教授プランとして創りあげたいと考えている.



## 注

1) 梅津徹郎「『総合学習』の授業論－昆布から見えてくるもの－」(北海道教育学会第 44 回研究発表大会，2000 年 3 月)

木下郁恵，高嶋幸男「羅臼昆布はなぜ高いのか？の授業－地域教材の開発と授業の検討」(『北海道教育大学釧路校研究紀要』第 35 号，2003 年)

西口二朗「北海道の昆布－食文化史を探り，子どもと共に創る教材づくりを－」(教科研・道民教共同研究集会，1993 年)

佐藤広也（札幌市内の小学校教師）は昆布教材による多様な実践を続けており, その一部は『作文と教育』,『教育』に紹介されている.

2) 鈴木秀一，高村泰雄，須田勝彦『講座日本の教育 6 教育の過程と方法』(新日本出版，1976 年)

3) 玉井康之「北海道のへき地の地域性を活かした地域教材開発とカリキュラム開発の必要性」,(『へき地教育研究（68)』2013 年，北海道教育大学 学校・地域教育研究支援センターへき地教育研究支援部門)

4) 高校生向けに読みやすい文献として, 田中彰『明治維新－日本の歴史（7)』(2000 年, 岩波ジュニア新書)，田中彰『明治維新と西洋文明－岩倉使節団は何を見たか』(2003 年，岩波新書）などがある.

5)　2013 年 12 月,「和食」がユネスコの世界文化遺産に登録された．日本政府が世界文化遺産に推薦した理由の一つに「健康的な食生活を支える栄養バランス」を挙げ,「うま味」を上手に使うことによって動物性油脂の少ない食生活を実現しており，日本人の長寿や肥満防止に役立っていることを述べていた.「うま味」とは食材そのもののおいしさであり，かつ日本独特の「出汁文化」なのである.

6)「昆布にみる日本の歴史」（スライド）を作成するにあたり，以下の文献資料を参考にした.


○大石圭一『昆布の道』（第一書房，1987 年）

○日本テレビ社会情報局編『謎学の旅』「歴史を変えた？昆布ロードの謎」（二見書房, 1991 年）

○読売新聞北陸支社編『日本海こんぶロード　北前船』（能登印刷出版部，1997 年）

○奥井　隆『昆布と日本人』日本経済新聞出版社，2012 年

○「昆布の歴史『北前船』の功績」（『faura』NO50　特集：コンブの科学，2015 年）

○村田郁美「薩摩組の働きから見る富山売薬行商人の性格」（京都学園大学人間文化学部『人間文化学部学生論文集』第 13 号，2015 年）

○北国諒星『北前船，されど北前船』（北海道出版企画センター，2017 年）

# A Teaching Plan Using Local Products as Teaching Materials:
## "Situating *Kombu* in Japanese History"

UMETSU Tetsuo

**Abstract:** I attempt to create a teaching plan which focus on *kombu* as a locally available ingredients.

**Keywords:** Kitamaebune merchant ships, *Ezo kombu* (Hokkaido *kombu*), patent medicine merchants of Toyama, the Satsuma Clan, Ryukyu, smuggling, Meiji Restoration